

老年学 10/July/2008

# 高齢社会を生きる 尊厳ある死 = 生のために

清水哲郎 SHIMIZU Tetsuro  
東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文学開発センター上廣死生学

1

《死》の理解 —  
《生》の理解

# 人生が終わること

- みなさんは、どういうことばを使いますか？
  - 「死ぬ」
  - 「居なくなる」「なくなる」
  - 「逝く」「別れる」
  - 「あっちゃさいぐ」
  - 「お迎えがくる」
  - 「永久の眠りにつく」

## 「死ぬ」の二つの面

- 「これはもう死んでいます」:何かを指して「死」という状態にあると言っている。
- 「父はもう死にました(もう居ません)」  
目の前のものを指して言えない=  
この世にはいない=  
どこかに逝った？

# 身体の死

- 「これは死んでいる」: 身体を指して言っている
- 身体が死ぬということ
  - 動いていたものが動かなくなる
  - 再び動く可能性はない(=不可逆的)
  - 変質しはじめる
- 生物一般について言えること。
- 葬る対象

# 人(格)の死

- 「Xはもう死にました」 語られる主体=人(格)
- 人(格)の死
  - 人格的交流ができなくなる 「別れ」
  - もう交流は再開しない(=不可逆的) 「永久の(別れ)」
- ここ(この世)には居ない (現世内)不在の主張
  - どこか(あの世)に行ったのか? 別世界移行
  - 「逝く・行く」こととして語られる →死者の世界の想定

# 現世界と冥界

話題領域2

話題領域1

生者の世界

死=不在化

別世界移行

死者の世界

## 参考：人（格）の死についての 別の考え方の例

- 人格的交流ができなくなる
- 身体と共に人格もあり続けている
- しかし、もうその活動を停止してしまっていて、再開は望めない 現世内不活性化
  - 「眠る」こととして語られる
- このような考え方をする文化においては「復活」ということが問題になる
  - 新約聖書の「ネクロス」は死者 & 死体



## 参考：人格の死についての別の考え方の例（続）

- 「父は10年間死んでいます」（＝10年前に死にました）
  - この世とあの世を包括する全体が話題領域になっている
  - 「死んでいる」は「この世とは別の場所に存在している」こと
- 別世界移行型 語り方は「不在の主張」ではない

# イザナミとイザナギの別れ

- イザナミの死
- イザナギはイザナミを連れ戻しにヨミ(黄泉)の国に訪ねる > イザナミ登場 会話の記述があるだけ
  - 人格的交流の再開 cf 口寄せetc.
- イザナミは「相談してくる間、覗くな」と言う
- イザナギは覗いてしまう
  - 身体が無残な変貌

\* 身体と人格の重なりと分離

**生物学的生命**  
biological  
life

と

**物語られる生命**  
biographical  
life

- 身体に注目する視点：
  - 生物学的個体
  - 医学が注目する対象
  - 人(格)の生にとって土台となる
- 人(格)に注目する視点：
  - 自分の人生の物語りを作りつつ生きている 主体としての個体
  - 仲間の物語りとのつながり
  - 誕生から死までの物語り

cf. 死すべき人

# 死者の世界？

- 私たちの文化は、あたかもどこかに死者の世界があって、死ぬことはそこに行くことであるような語り方をし、死者を送る振る舞いをする
- でも、死者の世界について、必ずしも確信しているわけではない
- それでかまわないと思っているらしい。

# 「死んでもひとりぼっちではない」 と看做す言説

私たちは仲間と  
共に生きている

話題領域2

向こうに既に  
行っている人々  
の仲間になる

話題領域1

生者の世界

死者の世界

死=不在化

別世界移行

死者の列に  
加わる

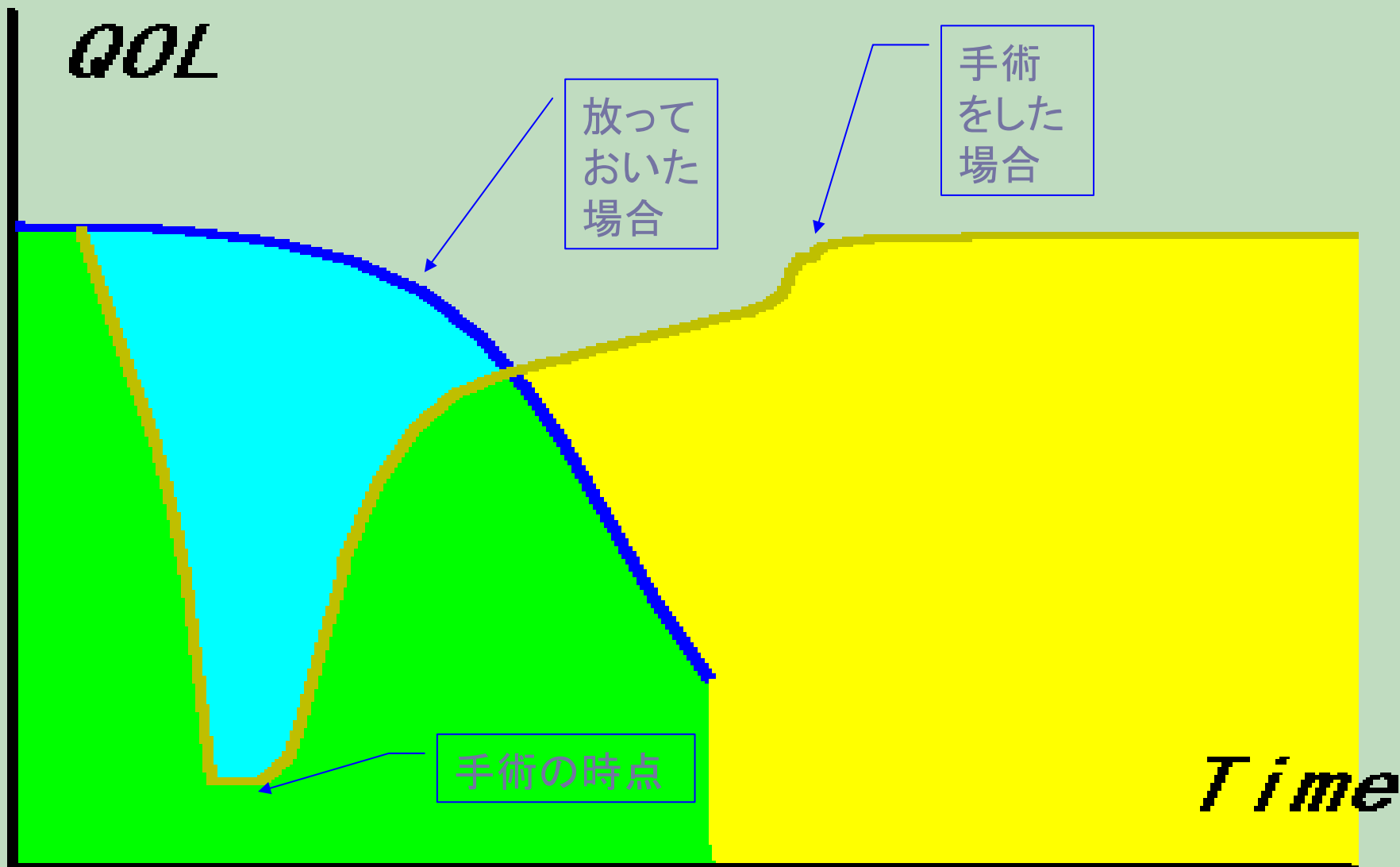
死後の世界をリアルなものとして前提する必要はない。  
このような語り方によって、構成されるもの

# 死者の列に加わる

- 私たちは共に支えあって、生きている
  - 死ぬことは決して、仲間の輪から独り離れて、孤独になることではない
  - すでに死んでいった人たちの仲間になる
  - 送るものも、やがて死者の列に加わることになっている
- \* こういう考えが私たちの語り方や振る舞いを支えている—  
語り方や振る舞いがこういう考えを支える
- \* 「死者の列に加わる」は、死後の世界を想定しなくても成り立つ言説でもある。
- \* 物語られる生の視点に属する
  - 誕生から死まで、人々のネットワークの中でダイナミックに生きる物語り
- 以上は、スピリチュアル・ケアのための基本的状況認識の一つ

## 2 QOLと尊厳ある生=死

# 医療の目的 = QOL × 余命をできるだけ大きく！





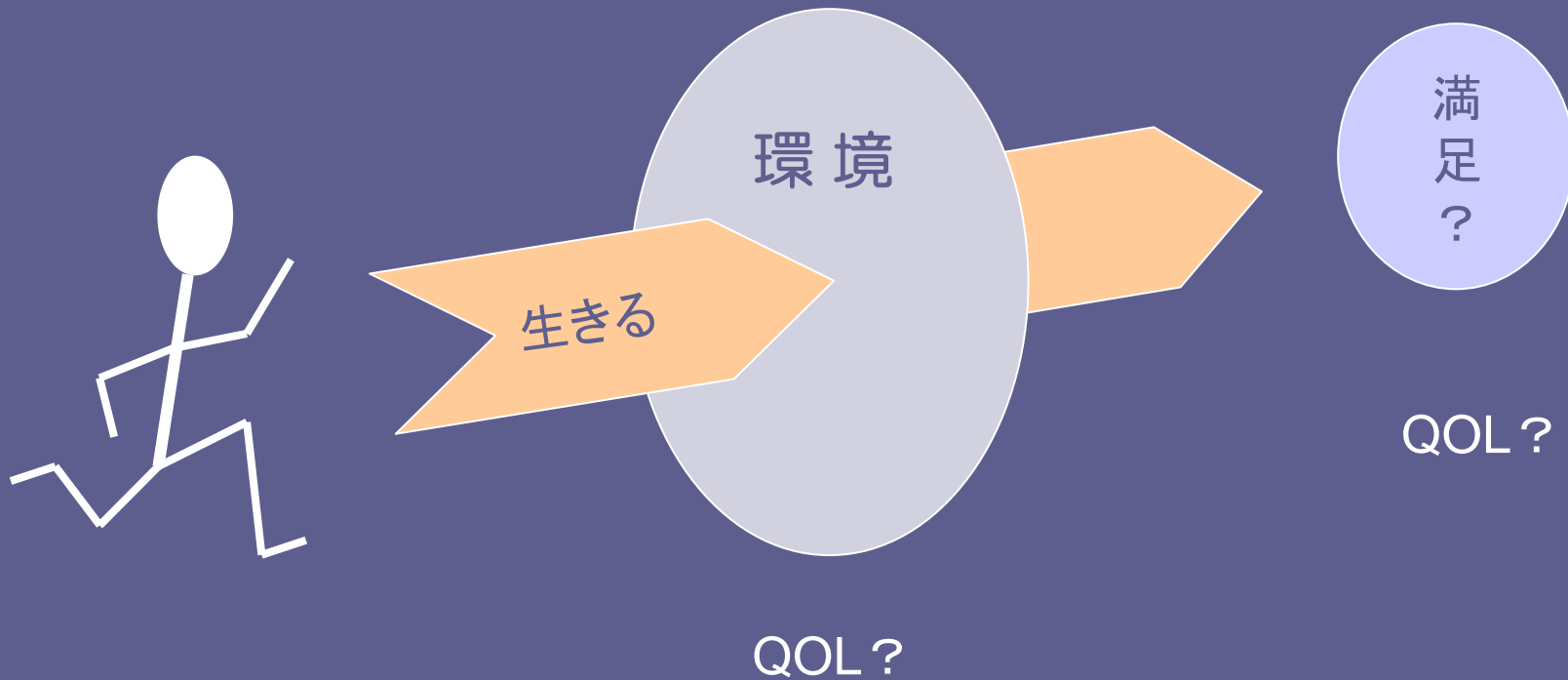
# 医療・看護が評価する「相手にとっての最善」 ＝ 生きる環境の整備

## ■ QOL — Quality of Life —:

どれほど自由であるか／人生のチャンス・選択の幅が広がっているかの評価

- － 痛み等の身体的不快・苦痛
- － 心理的苦痛／快適
- － 家族との関係
- － 生きる意味・存在理由
- － 身体の動き・機能
- － バリヤーフリーな環境
- － 社会的役割
- － 居心地

# QOL: 環境の中で生きる →満足・不満足



# 身体環境と周囲の環境の連続性

## ■ QOLを高く保つ:

やりたいことができる/快適に過ごす  
ことを妨げる要素に対して

－ 直接にその要素を取り除く

リハビリ、疼痛コントロール、...

－ 環境全体を整備することで補う

視力 － メガネ

体の障害－車椅子－バリアーフリーな環境作り

\* 人間の生活環境が一般にQOLを高める補い

# 但し書き：価値観・人間観

- 「相手にとっての最善を」探る際の態度
  - できないよりはできるほうが良い
  - できなくたって良い(居ることはできる)
- 2つの価値観をいかに併せ持つか
  - 「居ることはできる」→人々のネットワークの中で私は位置を持っているということ
  - ぎりぎりの状況で相手の尊厳を支える姿勢

# 《尊厳死》と《尊厳ある死》

－ 尊厳死 < 尊厳ある死 (death with dignity、dying with dignity)

- インターネットでヒットするのは、オレゴン州の「尊厳死法」(〈医師に幫助された自殺〉を一定の条件のもとで認めるもの)

→ 本来はある死に方を指す語ではなかった

－ 〈尊厳ある死〉はもともとは終末期の患者の最後の日々をどう支援するか、目標を示す用語(「尊厳と快適さをもって」「尊厳と平和をもって」)

- 「尊厳」は「死」を形容しているのではなく、死に向かって最後の生を生きている「人」のあり方を記述している

# 《人の尊厳》をどう捉えるか

《尊厳》 dignity 辞書を見ると:

- 1) 威厳ある見かけ・振舞い
    - Dignity is behaviour or an appearance which is serious, calm, and controlled; used showing approval.
  
  - 2) 尊重に値するという性質
    - Dignity is the quality of being worthy of respect.
  
  - 3) 自らに価値があると感じること
    - Someone's dignity is the sense that they have of their own importance.
- Cobuild English Dictionary

# 《人の尊厳》をどう捉えるか

《尊厳》 dignity には3通りの意味がある

- (1) 威厳ある見かけ・振舞い
- (2) 尊重に値するという性質
  - 《尊厳》は、価値の中でも「尊いものとして大事にする(に値する性質)」(cf. 所有物を大事にする)
  - 何かを「尊厳ある」と言うことは、「弄(もてあそ)んではならない」と語ることに他ならない。
    - 「受精卵にも生命の尊厳がある」「どのような状態になっても人の尊厳に変わりはない」
- (3) 自らに価値があると感じること(「〈誰か〉の尊厳」)
  - 主観的自己評価(≡自尊感情)／自らのこの生を肯定できるというあり方
    - 「こうなったら私の尊厳は失われた」(現実に尊厳があるかないかの話ではない)。

# 《尊厳ある死》をどう捉えるか

- 「尊厳ある死」death with dignity は、本来は「尊厳をもって死に至るまで生きること」dying with dignityである
  - 死に至るまで、自らの存在を肯定する自尊心をもって、生きるあり方を指しており、それが終末期ケアの目的であった。(＝スピリチュアル・ケアの目標)
  - 「尊厳が失われた(自らのあり方を肯定できない)状態で生きたくない」と言われたら？ ⇔
    - 「死を選択できる(ようにしよう)」: 生に対してネガティブな方向で動く
      - だがこれは、「QOLが低くて生きるに値しないのなら死を」という安楽死の論理と同じ。
    - 「尊厳を保てる／回復できるようにどう支えるか？」
      - ケア的姿勢はこのような発想をする



# 中間まとめ：ケアに向けて

- 誰でも、いつかは人生の終わりを迎える
- 仲間と共にあること、独りではないことの大切さ
- 身体も大事—でも、みんなと一緒にいること、交流があることは、もっと大事(人間の精神性)
- 尊厳をもって最後まで生きられるようにサポートする